

地域性

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

旅への憧憬

あの時は新型コロナウイルスなるものがここまで広範囲に私たちの暮らしの邪魔をするとは思ってもしなかった。横浜港に到着した大型豪華客船。日本ではあれが始まりだった。旅は高リスクな行為という印象が多くの人の心に残った。その後、国境を越える旅は大きく制限されることになった。そして、国境を越えない旅までもが自粛の対象になり、私のような小心者は未だに居住地である東京都から外に一歩も出ていないという有様だ。旅に行きたい。思いは募る。

登山とか釣りとかダイビングと

等々、日頃テレビ番組等で目にする話題から拾ってみても、案外にその幅は広い。

土木のことは専門外なのでわからないが、建築の場合、日本の地域性、日本に來ないと経験できないものと言ったら一体何になるだろう。京都や奈良に代表される伝統建築は、他の国の場合もそうだが、そこにしかないものだ。狭い道に面して小さなビルがゴチャゴチャと立ち並ぶ渋谷、原宿、ミナミのあの商業空間も日本の建築の地域性と言えるかもしれない。

そして、日本独特の生活文化を代表するここにしかない建築空間ということになると、やはり床に畳を敷き詰め、襖や障子で仕切られ、床の間や違い棚が設えられ、自然を感じさせる庭と面したような「和室」を挙げておかなければならないと思う。読者の中には、和室のような空間は中国や韓国や他のアジアの国々に同じようなものがあると勘違いされている方もいらっしゃるかもしれないので、申し上げておくが、和室は日本固有の歴史

かそういう趣味はないものだから、旅先は自ずと人の住むまちなになる。クールに言えば、

「人の住むまちなってどこでも同じようなものだろう。特に今時はどこに行ったら同じような建物に同じような店が入っていて、宿だつてどこも似たようなもの。わざわざ金と時間を使って旅なんかに出なくても、いつものまちでその分美味しいものでも食べていた方が余程良かったですよ」

ということになりかねないが、いえいえ、どうしてどうして。まだまだ旅は捨てたものじゃない。そこに行かないと食べられないものはあるし、そこに立つてみないと味わえない

の中ででき上がってきたオリジナルである。日建連の会員である建設業者の中にも、長い業歴の中で多くの和室を手掛けてきた方は少なくないと思う。

どこでも同じはず つまらない

本連載の二〇一八年四月号でも紹介したことがあるが、この日本の生活文化を象徴し、インバウンド需要への刺激の一つにもなってきたであろう和室がどんどん衰退しているという厳しい現実がある。

住宅金融支援機構が、機構の関連する融資制度を使って新築された戸建住宅の内、数千棟を対象として調査した結果によれば、約三〇年前の一九八七年に和室のない新築住宅は全体のわずか一・二%、約二〇年前の一九九六年でも和室のない新築住宅は五・四%に過ぎなかった。ところが、驚いたことに、約二〇年ぶりで二〇一七年に同様の調査を試みたところ、和室のない新築住宅は五〇・八%、

い風景がある。建物やその並びにだつてそのまちらしさは残っている。

確かに、以前と比べれば、それぞれのまちらしさ、地域らしさは薄れてきているが、海外旅行を例にとれば、今でも容易に理解していただけるだろう。それぞれの国やまちの衣食住等生活文化の地域性は維持されているし、自分の国やまちとは違うそれを体験するのが楽しくて旅に出かけるわけだ。

世界で 日本にしかない空間

観光立国を目指し、着実にインバウンド消費を増やし、東京オリ

半数を超えていたのである。しかも一九九六年までは過半数の新築住宅が二室以上の和室を持っていたのに対して、二〇一七年には二室以上の和室を持つ新築住宅が一五%にまで急減していたのである。

六年ほど前から、こうした厳しい現実についての危機感を共有した方々と、和室の歴史的な成立や普及や衰退、そして変容の経緯を把握し、現代日本人にとつての意味や、変形しつつも引き継がれている空間としての特質を見出し、そして未来への継承や新たな展開の可能性

ンピック・パラリンピックでその勢いを倍増させようという多くの日本人の目論見は、残念ながら二〇二〇年時点ではコロナ禍に完封されてしまった。しかし、まだ二〇二一年開催の可能性は残されているし、その後の大阪・関西万博もある。そこに希望を見ている関係者が多いのは当然のことである。

ところで、旅で日本に來る人の立場に立った時、ここまでやって来て味わいたいという日本の地域性というのはどのようなものだろうか。日本独特の多様な食文化、サブカルチャーの聖地、品揃え豊富で品質の確かな買物文化、接客態度の丁寧さ、まちの安全や清潔

を見極めようと、色々と勉強してきた。その仲間たちとの最初の成果を『和室学 世界で日本にしかない空間』という単行本の形で漸く世に出すことができた。私たちの対外的な活動の始まりとして位置付けられる。ここから、和室の価値と未来像をもっと多くの方と一緒に考え、できることならば「和室とそこでの暮らし」を「和食」のような無形文化遺産にできるような運動を展開していきたいなど話し合っている。世界中どこでも同じはずまらない。



『和室学 世界で日本にしかない空間』(平凡社刊)